

夏風と戦争

静岡英和女学院高等学校 森田 蘭

数年前に亡くなった曾祖父のことは未だによく分からない。正直、口数が少なく、いかにも気難しそうな見た目であったこと、健康のために毎日の散歩を欠かさなかったことしか印象がないのだ。『正しい』や『厳格』といった言葉をそのまま人間にしたような人。骨と皮しかないような細く小さな体のどこから出しているのか聞きたいほどの威厳の持ち主。曾祖母の家に行ったとき、曾祖父と共に食卓を囲む時間は、幼い自分にとって憂鬱な時間だった。曾祖父が口を開くと背筋が伸びた。放たれる言葉に母も祖父母も耳を傾け、

「お祖父ちゃんそうなの？」

「お義父さん良かったですね。」

「親父がいいなら俺もそう思う。」

と肯定的な言葉しか返さない。形容し難い気まずさと気味の悪さを感じて苦手だった。そして、そんな居心地の悪い時間である曾祖父はもっと苦手だった。話しかけられたくないし話したくない、これが幼い私の本音だ。

そんな思いと裏腹に曾祖父と必ず話をしないといけない日があった。八月十五日。終戦記念日である。夏休みに母の実家へ帰省すると、曾祖父は私と妹を部屋に呼び出して、自身の戦争体験を話した。物のない時代でどう生活したか、戦地での体験、戦闘機から海に落ちて何十キロも泳いだこと、生き残ってしまい日本に帰るのが怖かったこと、帰国後の苦しい生活、今の世代は平和で恵まれているから感謝しなければならぬこと。話し終わると曾祖父は必ず、

「二人は戦争についてどう思う。」

と質問してきた。

「絶対に戦争を繰り返したらダメだし、平和に感謝して過去のことを忘れないでいたい。」小学校の平和学習で使い古した定型文を毎年答える。今思うと、もっと話を聞いて考えを言い、質問すればよかった。黙って聞き、よく分かりましたと神妙な顔を作るしかなかったのが悔やまれる。しかし、幼い私にとって、いかに早く曾祖父との時間を無事に終わらせるかが重要だったのだ。

関係性が変わったのは曾祖父が入院した中一の夏だった。中学生になった私は、某艦隊のゲームに熱中するようになり、太平洋戦争ごろの歴史に興味を持つようになった。夏休み、

母に言われてお見舞いに行ったとき、曾祖父に

「戦争の話聞かせてほしい。」

と頼むと静かな声で教えてくれた。肺炎を繰り返して衰弱していた曾祖父の声は最早、声と言えないものではなかったが、私は耳をすませて言葉を拾った。昔の私が見たら驚くどころか怯えるかもしれない。私がソワソワと艦隊の話振れば

「大和を見たとき、その気高さに感動して胸が震えた。」

「重巡青葉には友人が配属されて……」

と懐かしむような顔で語ってくれた。私は曾祖父の顔に青年らしい雰囲気の一端を見た。私にとって艦艇は過去の遺物であり、史料である。しかし、戦争下で青春を過ごした曾祖父にとつて、己の若かりし頃を彩るものだったのだろう。ずっと避けていた曾祖父の新しい一面を見た。厳格な曾祖父にも自分と同じく青年だった時があったのかと当たり前なことに感動したことを覚えていた。それから毎日面会に訪れた。体に障らないように短時間だけ。

パイプ椅子に腰掛けて曾祖父の話に耳を傾ける。病室の窓から吹き込む生温い夏の風が息苦しい幼い記憶を塗り替え、あの瞬間、確かに私たちの距離は縮まったと実感できた。

その年の秋、曾祖父は帰らぬ人となった。享年九十六歳。夏と遜色ない残暑の日。病室での時間があったからだろうか、弔辞を考える時も読む時も涙が溢れてきた。あの時間がなければ、ぼんやりと悲しい気持ちになるだけだったかもしれない。高校三年生になり、進路を決めた私は大学で史学を学ぶことを選んだ。曾祖父との時間を通じて、教科書以上の自分が知らない歴史を知りたいと思ったからだ。これから学ぶことで曾祖父の思いをなぞれたらいいと切に思う。